
当世柳生新陰流異聞 ~ 対決・会津一刀流（「あいつ」外伝）

泊瀬光延

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

当世柳生新陰流異聞 〔対決・会津一刀流（「あいつ」外伝）〕

【Nコード】

N1720F

【作者名】

泊瀬光延

【あらすじ】

友人の作家の登場人物を拝借しました。現代に残る古武道の素晴らしさを描きたいと考えてます。林太郎はサッカー選手ですが新陰流の一派の師範を祖父に持ってます。片や競合大学の上泉もサッカー選手ながら会津一刀流という剣術の名手です。（上泉の祖先は上泉主水という新陰流を興した上泉伊勢守の息子と言われています。）ある日、二人は大学の剣道部の試合に引っぱりこまれ、戦う羽目になりました。現代に伝わる2流の因縁の対決。古武道の剣理と技を駆使して現代剣道とは全く異なった試合が行われます。

1 俺と林太郎（前書き）

ここに出てくる古武道剣術の流派は、かつて実在し、また新陰流は現在も連綿として残っています。新陰流においては、尾張柳生家を宗家に頂く本派と明治時代の尾張柳生宗家、柳生厳長の高弟達が引き継いだ流れ、遠く流祖・上泉伊勢守や柳生宗厳（石舟斎）の高弟達が残した流れ、新陰流のもととなった愛州移香斎の影の流れなどの後継者が残っています。

「会津一刀流」に関しては現在継承者がいるかは、著者は確認していません。上泉伊勢守の子または甥と言われる上杉家食客だった上泉主水がそれを名乗ったと「上杉将士書上」には載っております。これは戦友である前田慶次郎が名乗った「穀蔵院一刀流」の向こうを張って名乗ったのではないかと思えます。双方とも諧謔のつもりだったのかも知れません。ここでは主水の流派が会津に生きていたという想定です。

1 俺と林太郎

俺の名前は角南すなみと言う。

二浪してようやく入った甲陽大学の文学部で、目下小説家を目指して勉強中だ。

俺の目指しているのは純文学でもラノベ（ライト・ノベル）でもない。歴史あるいは時代小説だ。あまり一般受けしない分野だが、俺にはどうしても書きたいものがある。

今は廃れてしまったが、中世、特に戦国時代にあつた『武家の華』と呼ばれる衆道文化だ。

情報超過のケイオティックな今の文明のお陰で、同性愛などのタブーはこの無宗教の国では殆ど無くなった。ニューハーフと言われる人達が堂々とテレビに出演している。勿論、彼らに期待されるのは『間違つた性に生まれてしまった大人』の会話である。

物心つかない子供が見ているかも知れない放送で、マスメディアの観点から、番組を作る連中の『綱紀』がないと言われても仕方がない。

一般的な男と女の性の普通性を持っていない人達が悪いと言っている分けではない。だが、それを売り物にするテレビ局の『常識』がどうかと言っているのだ。本来はそつとしておいて人間同士、受け入れることが筋ではないだろうか。

単に、暇な人間が無駄な時間にする興味本位の無駄なおしゃべりの種にされ、社会的には何の意味もない話題なのだ。

日本人は、江戸期に花咲いた男色文化を持っている。

これは主に『陰間』と呼ばれた売色のプロフェッショナル達と、彼らと『遊ぶ』好事家達ホウシヤカが育んだ文化だ。

しかし俗習としての男同士の愛は平安時代からあつたと言う。お

寺には稚児と呼ばれる少年達が居た。彼らは僧達から礼節と教養を叩き込まれ、すがたかたち姿形、立ち居振る舞いは、『庶民』とは全く異なっていた。『稚児草紙』と呼ばれる秘伝の巻物にそのありかたを垣間見ることが出来る。

彼らは女性ではないが、憧れられ恋される『対象』になりうる存在だったのだ。

武家の少年達も躰、教育を厳しく受けた。彼らの主に仕える凜とした姿に恋する大人も多かった。

そういう話を集めた井原西鶴先生の『武道伝来記』や『男色大鏡』は文学でも異色の傑作と言っている。

俺の目指すは、かような『失われた文化』の物語なのだ。だが、俺としてはそういう物語に武道の味付けをしたい。

中世に産声を上げた種々の古武道の精神は、これまた現代人には理解出来ないところが多い。また、武士という存在、子供の頃に腰に木の棒をさしてチャンバラごっこをした男の子の記憶。

棒きれを腰に差すと、自分が特別な使命を持って、『正しく』生きていくような感覚。これが大人になっても夢として残っているのだろう。

新聞などで毎日のように『正しく』生きていない連中の記事を見かける。

罪が既に露見しても、やっていないと嘘をつく見苦しさ。

古人の教えを現代人は全く忘れ去っている。腐った会社社長や収賄の政治家は、二千年も昔に彼等のために残された言葉、『李下に冠を正さず』という警告も知らないのだ。

二千年前にこれほどの真理を書き残すような人がいたと言うことは、人間の精神が全く進化していない証拠だろう。そして自由主義という思想で、そうした一個毅然とした人達が死に絶えてしまった。一体、その時代にどんな人達がどのように生き、また死んでいった

のだ。

真摯な生き方をした人々の一つの例が、戦国時代の武士達ではなかったかと俺は考えている。

そんなかなで俺は、（俺自身の嗜好もあるのだが、）戦国期に流行った武家の衆道の物語を研究しているのだ。

2 懇願

告白しよう。俺は恋してる。

その人は女性ではない。男なのだ。

俺は今まで同性に性的な興味を持つことは無かった。女性なら数限りなくある。高校の卒業の時、一緒に新宿御苑を散歩してくれた彼女を新宿駅南口の改札で見送ったあと、俺は当然、小説に没頭しようと思った。

大学に入って三年の時、『彼』にあった。

彼は遅生まれのストリート入学。だから俺とは六年もの歳の差がある。彼の容姿は中性的できれいな女顔の少年と言ったところか。

最初、逢った時、『女だったらな』と思ったものだ。

『異性』として興味は無かった。

しかし、彼は俺の書きかけの小説を読んで、涙を一筋流した。

その時、どきつときたんだ。

その瞬間、俺は彼に惚れてしまったようだ。

その小説は、戦国武士の前田慶次郎について書いたものだが、主人公は慶次郎じゃなくてその家来の二人だ。一人は中年の古武士、小吉。そして小吉が恋するのが刺客だった美しい少年、りん。

彼らの今生の契りの物語に彼、林太郎は涙したのだ。

俺は林太郎と知り合って、俺の気のおけない大学仲間を紹介した。何が気に入ったのか分からないが、林太郎は年上の俺達の中に入ってきた。

俺は何食わぬ顔で林太郎とおしゃべりし、冗談を言い合う。だが俺の心は張り裂けそうに高鳴っているのだ。

俺にとって林太郎は男の姿をした『異性』だった。

ある日、キャンパスでサッカー部の練習を終えた林太郎と、今日取ったビデオのことをしゃべっていた。

汗びっしょりの林太郎の半袖のユニフォームの生地は薄く、その胸に張り付いて二つの突起が見える。額から別れて耳やうなじに掛かる肩までの長い黒髪。中性的な首や肩、体毛の薄い膝下の足を交互に見やりながら、俺は下腹に疼くものがある。でも駄目だ。気付かれてはならない。

林太郎に、彼のシユートの瞬間を撮影して欲しいと言われて俺は二つ返事で引き受けた。公然と彼の全てが撮影出来るなんて、千載一遇のチャンスだ。

どついう風にダビングすれば良いかなどと話している時、剣道場から走ってくる者がいる。

そいつは息せき切って、稽古着に胴と草ずりを付けたままで、林太郎の側に駆け寄る。剣道部の副将をやっている男だ。今し方、ライバル校の越後大学の剣道部が訪問してきて試合をしていたという。「長尾さん・・・で、どうしたの？」

林太郎が聞いた。

「引き分けたんだが・・・試合の後、試合稽古をしようと奴らが言い出したんだ」

「試合稽古？」

「勝ち抜きの総当たり戦さ。とにかく弱い連中から一人ずつ当たって、どちらかの部員が全て負けるまでやろうということに・・・」

「？」

「俺達は有利に勝ち進んで、五人くらい残して奴らの主将の手前の一人まで倒したんだ。だけどそこで止まった」

「その一人って・・・？」

「どうも正規の剣道部員じゃないらしい！だが、もの凄く強いんだ

「前の試合には出て来なかったのに」

副将は懇願するように林太郎に言った。

「りん……お前の家、新陰流の師範だろ！」

「ええっ！」

驚いたのは俺のほうだ。知らなかった。

林太郎は機嫌悪そうに、

「……確かに俺の爺ちゃんは柳生新陰流の一派の師範だよ」

柳生新陰流！

それは柳生石舟斎が上泉伊勢守に就いて戦国末期に打ち立てた流派だ！色々な場所や形で現代まで残っているとは聞いていたが、まさかこんな身近に道統を継ぐ者がいるとは！

「でも俺は興味ないね」

林太郎の言葉に、長尾が慌てて言った。

「そんなこと言うなよ……この間、剣道の合同授業で見せてくれたじゃないか！」

「あ……あれはふざけてやったただだよ！」

「でも剣道部の俺達でさえ、お前を打ち込めなかったぞ！剣道の宇佐美先生が、お前の爺様を知っていたからやらせたんだろ！」

「……」

林太郎は下を向いて拗ねたような口をした。

俺はおずおずと聞いた。

「……助けてやらないのか？」

こう言った理由は、俺は林太郎の抜群の運動神経を考えたからだ。そして彼の武道の技を見たくなくなっていった。

今日、間近に林太郎の動きを撮影して良く分かった。尋常な動きではない。スローモーションで見ると、瞬間瞬間の動作に肉体を合理的に使っている。普通の、体を捻ったり飛び跳ねたりするアスリートとの動きとはかなり違うのだ。新陰流という古武道をやっていると聞いて、その秘密が分かったような気がした。

林太郎は困惑した顔になった。

「・・・」

俺は興味本位で言っていることを隠して言った。

「部外者に正規の剣道部員が齒が立たないってことが評判になったら、彼らも立つ瀬が無いよ。助けてやるのも・・・」

林太郎は俺に悩ましい目を向けた。嗚呼・・・

「大介がそういうのならやるけど・・・負けても良いよね」

「そんなこと言わずに頼むよ・・・」

副将の長尾も悲痛な声を出した。

3 挑戦者

俺達が道場に行くと中央に対峙している二人の剣士がいた。

片や、我等の大学の剣道部主将、宮本だ。

相手は・・・顔が大きいのか、被った面の横腹が脹れあがっている。巨大な体に合わないつんつるてん（衣服のそでやたけが短くなつて手足が出ている様子）の胴着の袖からは、毛むくじやらの太い腕が見える。

宮本が頻繁に高い気合いを発し、爪先だつて竹刀の先を震えさせて牽制している。『せきれい鵲鴿』の尻尾の様だ。

しかし、相手の剣士は少し高い中段に構え、どっしりとした腰と足で微動だにしない。宮本の姿勢と違うのは、後ろ足を真っ直ぐ伸ばし、踵を全く上げていない。

「・・・な、あれ、古武道だろ？」

長尾が林太郎に囁いた。

林太郎は答える代わりに、驚きの目で敵の剣士を見ている。

剣道部にとって幸運だったのは、試合が終わってあらかたの見物人が去っていたことだ。試合の後、稽古と聞いてあまり剣道に興味の無い人は帰ってしまった。しかし、このままで行けば、我が校はかなり不名誉な状況に陥ることは間違いない。

あきらかに、試合にも出ていなかった異様な剣士に負けを喫しているのだ。

越後大学の部員達は、後ろに座って腕組みなどしてにやにやとしている。

主将が上段に構えた。瞬時に片手で打ち出される彼の上段打ちは、

この大学では防げる者はいないと言う。全国大会でも個人戦で良いところまで勝ち残った。

宮本は右の足を細かに動かし、敵の隙を窺う。

敵の剣士がすつと右肩を前に回転させて、竹刀を持つ両手を左に移動させた。その瞬間、宮本は飛び込んで、右片手打ちで相手の左横面に打ち込んだ。

きええいという鋭い気合い。

すると相手の剣士は左に右肩を出したまま右足をとんと踏んで前に出た！

竹刀を左に引きつけ、左頭に打ち込まれた竹刀を受けた瞬間、凄い速さで左足を踏み込んで肩を今までと反対の右に回し、竹刀を主将の右面にそのまま打ちつけた！

受けたのと同時に体が前に平行移動をして、肩がぐるりと入れ替わった様に見えた。

「面有り」

両校の部を受け持つ体育教師の手が、相手側に上がった。

蹲踞をして戻ってくる主将の宮本は、よろけながらしきりに首を傾げている。強烈な打撃を受けたが、どう負けたのかよく分からないらしい。この男は大学剣道の世界では一目置かれているのだが。

「もう終わりですか？」

相手校の剣道教師がほくそ笑んで、我等の宇佐美先生みづみに聞く。宇佐美先生は仏頂面でこちらを見た。

林太郎と目が逢うと、にやっと笑った。

「いや・・・今、控えの選手が来ました」

どうも胸中、藁をも掴みたいらしい。可哀相にも林太郎は悲劇のヒーローにされてしまう。

宇佐美先生が寄ってきて、

「林太郎、頼む。相手校の教師の最上は俺の大学時代のライバルな

んだ。野郎、飛んでもない奴を見つけて来やがった・・・あいつはかなりの古武道を修行した奴らしい。子供の頃からやってなければあんな動きは出来ん。お前もそうだろう？頼むよ」

林太郎は溜め息を突いて、

「・・・分かりました。やるだけやります。でも負けても文句無しですよ」

「焼き肉驕るぞ！」

「さっきのあれは何て技だ？」

「・・・返し」だよ。防御と攻撃が殆ど一体となっているんだ」

林太郎は道場の壁の前でユニフォームを脱ぎだした。俺は・・・部員が持っていたタオルをひつつかんで林太郎の前に立つ。女ならともかく、男にそういうことをやってやるのはかなり浮いた行為だった。

壁に向かっていた林太郎が俺を見て笑った。

「・・・有り難う」

恥ずかしさの報酬に何ていう可愛い表情！

だが、バスタオルぐらいじゃ林太郎の体を隠せなかった。

ビキニパンツ一枚になった後ろ姿を、こともあろうに敵方に披露してしまった。汗で濡れたビキニパンツは丁度、林太郎の妖艶なお尻の割れ目あたりで引っ掛かっている。腰が括れ窪んだ腰の背骨。それが女性のようなフォルムを作っている。俺は生唾を吞んでしまった。

後ろを盗み見ると、あの太男は胡座をかいて道場の中央で林太郎を待っている。まるで熊が座っている様に見える。面の中から鋭い目で林太郎の肉体を眺めているようだ。

借り物の稽古着だが、着終わったその姿に皆、嘆息した。

端正な容姿に肩までの黒髪、長い首。美少年剣士の誕生だった。

それにどうも普通の剣道部員がやるような着付けではない。侍のよ

うな本格的な格好だ。

宇佐美先生に、居合用の帯を借りて袴の下に巻いている。そのの上に袴の紐を巻いて少し下に固結びしている。後ろで居合用の帯を巻いて留めているので、袴の後ろが腰から突きだしたように見える。林太郎が着ると何ともセクシーだ。

4 新陰流と会津一刀流

「木刀借りるよ」

林太郎は形稽古用の木刀をひよいと持つと、すたすたと胴も面も着けずに中央に歩いていった。みんな吃驚だ。

宇佐美先生も最上先生も驚いて中央に集まった。異様な剣士もゆつくりと立ち上がり、四人が輪になる。

「お・・・おい、林太郎！木刀で何するんだ？」

林太郎は敵の面を睨みながら、

「心配りません。怪我はさせませんよ。ただ、打ち身はひどいかも」

両先生は顔を見合わせた。

その時、かつかと異様剣士は面を被った顔を上げて笑った。そして籠手を投げ捨て、面の顎を掴んで一気に取る。

面の中からはまるでゴリラのような髭面が出てきた。眼窩は窪み、ぎらぎらと光る不気味な目が奥にある。

「あ！貴方は上泉さん！」

「よう！りんちゃん！君も引きずり出された様だな」

彼は越後大学のサッカー部のゴールキーパーだ。天才キーパーと言われ、プロから注目されている人物だ。我々の大学と常に大会で当たるのでお互いによく知っている。

上泉は味方の最上先生に言った。

「先生、お互い、古武道で戦うんですから、やはり木刀ですよ。心配りません。型どおりにするだけですから！」

両先生も少し納得したのか、両者の願いを聞き入れることにした。「いいか！本気になったら、そこで止めさせるからな！」

対する二人はにっこりと微笑んで頷いた。

だが、二人の胸中は、幼い頃から学んできた古武道を試したくて、火花を散らせていたに違いない。

お互いに木刀を前に置いて、正座をして爪甲礼そつこうれい（指を丸め爪を床に付けるようにして行う軍中の略式礼）をする。そして二人とも右足からすくと立つ。まるで剣豪小説の世界のようだ。

俺は持っていたビデオを必死に回した。

二人は四メートルほどの間合いを取っている。

現代剣道は、間合いを既に越えた時点から勝負が始まる。つまり双方、一步踏み出せば相手を打てるほど最初から近くにいる。だが、古武道は、常に遠い距離から勝負が始まるのだ。如何に間合いを詰め、相手の先を取るかが古武道、いや、日本刀を持った武士の戦いの本質なのだ。

上泉は木刀をゆっくりと右横に高く上げ、八相あるいは霞の構えと言われる形になった。腰をぐつと落とし、足を前後に開く。左足と左肩が前に出る『偏身ひとえみ』と言われる体勢だ。

林太郎は右足前の中段の構えを取っていたが、先ほどの上泉と同じように、木刀を持っていてる拳を左に平行に移した。それとともに右肩が廻って、浅い右の偏身となった。木刀の先は林太郎から見て上泉の首の当たりに付いて、刀身は斜めになっている。

俺はビデオのファインダーから目を離して林太郎の姿勢に見入った。

何てきれいなんだ。およそ人間が取れる、優れた姿勢の一つかも知れない。

上泉から見れば林太郎の体は木刀の中に隠れているはずだ。つまり、相手がどこを打って来ても、木刀を上げ下げするだけで防ぐこ

とが出来るのだ。

俺は勉強した剣法の古文書の言葉を思いだしていた。『刀中蔵』（とうちゆうざう）と言って、相手の攻撃を防ぎ、かつ打たせない構えなのだ。

お互いにするすると前に歩み出した。現代剣道のように剣先で牽制することもなく、双方の表情も普段のままだ。皆、息を呑んだ。お互いの間合いに近づく。あと、一歩で浅く踏み込むだけでお互いに当たる！

上泉の左足が上体を残したまますつとせり出た。足の裏を付けたままの摺り足で、しかも指が全て上を向いて反っている。

その瞬間、凄まじい勢いで上泉は木刀を右肩上から振り下ろした。林太郎の右偏身の唯一のすきである左手の拳を狙ったのだ！

何が心配ないだ！あれが当たれば林太郎の拳は砕かれる！

だが次の瞬間、皆がどよめいた。

林太郎の右足が床をどんと踏んで木刀を左に回した。

鋭い木刀の打ち合う音。

次の瞬間、上泉の木刀は林太郎の拳があつた当たりの空間で、林太郎の木刀に上に乗られて、止められていた。

林太郎は、先よりもさらに右肩を前にして、打ち留めた木刀の先を、上泉の喉もとに突き入れようとしていた。

驚いたことに、上泉の体勢は崩れていなかった。

木刀の上に乗られていても、右に打ち出してなつた右偏身は、腰が入っていて足も大地を踏みしめている。林太郎の突きを木刀の先を右に下げ、左に踏み出しながら右脇に流すと、左手一本で木刀を取り上げ、林太郎の後方に体を回しながら、林太郎の左の後足の踵目掛けて振り下ろした。

俺はあやうくビデオを落としそうになった！

サッカー選手として大事な林太郎のアキレス腱を打つなんて！

だが木刀が当たる瞬間、林太郎の体は宙を舞い、右回りに一転して上泉に向き直った！

今度は左肩前（左偏身）になって、林太郎の木刀は左斜めに下がっていたが、左足先の当たりに剣先を付けている。あくまでも『刀中蔵』の構えを崩さないのだ。

上泉はにやつと笑って言う。

「やるな・・・新陰流だな？」

「貴方は？」

上泉は左足前の逆の青眼の構えを取りながら言った。

「会津一刀流！」

5 間一髪

見ていた両先生は両者の真剣な戦いを見て仰天した。止めようとした。

だが遅かった！

上泉は上段に木刀を上げ、凄まじい勢いで左足を踏み出し、林太郎の空いた面を狙い降り下げた。

これまで両者は片足を強く踏み込んでいたが、決して両方の足を上げていない。上泉の足打ちを避けるために林太郎は飛んだが、それ以外は足の裏を床にびったりと吸い付くように付けている。

重い真剣を持った時、確実に相手を両断しなければ、武道の意味が無いのだ。

現代剣道のように体勢を崩したまま相手を打つなどは、古武道の常識では考えられない。致命傷を与えなければ次ぎに自分が危なくなる。よって刀を振る時は、常に一刀両断の気持ちでなさなければならぬのだ。

上泉の木刀が林太郎の頭を砕こうとした瞬間、林太郎の木刀は跳ね上がり、下で斜めであったそのままの角度で上泉の木刀を受けた。・・とそのまま林太郎の木刀は頭の上でくるりと廻り、右肩の回転と共に上泉の首を打った！

だが、上泉もさる者、跳ね飛ばされた木刀を手前に引き、そのもの打ち（切っ先から十センチほどの所）を峰から右手で挟んで、林太郎の鳩尾に向かって突き出した。

「ああ！」

俺はビデオを落とした。

両者ただでは済まない。林太郎が怪我を・・・いや木刀だ！怪我で済まなかったら！

しかし、林太郎の木刀は上泉の首に当たる寸前で止まっていた。上泉の木刀は、林太郎の鳩尾の手前にぴたりと付けられていた。

「お、おい！大丈夫か！」

二人の先生が駆け寄ると、二人は彼らを見てにこりとした。そして上泉は人差し指で林太郎の首に付いた木刀を押しつける。二人とも汗びっしょりだ。

後から聞いたのだが、彼らの流派での『斬り』は、刀がその性能（『働き』と言う）を百パーセント発揮するように体を使う。現代剣道や巻き藁を斬る時のように『行ってこい』的な不確定性は殆ど無く、肩と肘を真っ直ぐ伸ばした両腕の二等辺三角形で振られる剣は、斬り下げるどの角度でも止められるそうだ。

その気になれば畳を床まで両断も出来るし、間一髪で首の皮一枚を残して止められるのだ。

三島由紀夫が自衛隊で切腹した時に、林太郎の様な古武道を心得た者がいれば、介錯の失敗であるような苦しみは味あわなかっただろうに。

上泉が野猿のような顔を崩して笑った。

「今度はサッカーで勝負だな！」

林太郎は、背が十センチ以上高い上泉を上目で見て、にっこりとした。

「ええ・・・今度は相打ちでは済みませんよ」

ライバルとして見つめ合う二人に俺は嫉妬した。

嗚呼・・・俺もあんな目で見つめ合えたら・・・

「大介、ちよつと手伝って」

サッカー部室まで稽古着で来て、林太郎は着替えようとしていた。試合中、越後大の奴らも林太郎のことを食い入るように見ていた。

そんな奴らの前で着替えるなんて出来ない相談だ。林太郎もそれは分かっているのだろう。小さい頃から女の子の様子に見られて来たという不満がある様だ。

俺は着替えの手伝いに選ばれた・・・そう、俺には恥ずかしくないんだ・・・く。

「・・・帯解いてくれる？」
「えっ？」

ロッカー室には誰もいない。俺は誘われているのじゃないかどきりとする。

「指が動かないんだ・・・」
「えっ？」

驚いて林太郎の手を見ると右手の親指が真っ赤に腫れている。骨には異常無さそうだ。

「あいつの八相を受けきれなかったんだ。凄く重い斬りだった」
遠目では、しっかりと上泉の木刀の上に林太郎の木刀は乗り、斜め切りを停止させたと思った。

「あゝあ、これが知れたら爺ちゃんに怒られる」
俺に帯を解かせながら、林太郎はちゃめつけたっぷりに言った。袴が落ちると目の前にビキニブリーフが現れる。汗と林太郎の甘い体臭がする。

「有り難う。あとは自分で出来るよ」
後ろを向いて胴着を下に落とし、タオルで体の汗を拭く。

「爺ちゃん、俺に師範を継げってうるさいんだ」

「こ・・・今度、話を聞きたいな・・・古武道の」

「聞けばもう止められないよ。爺ちゃん得意になって話し出すから・・・」

俺は言葉を交わしながらも誘惑と戦いながら、林太郎の妖艶な後ろ姿を見ていた。

それに気付いて林太郎は恥ずかしそうに言った。

「・・・もう良いよ。外で待ってるよ」

これからも俺は我慢という『苦行』を強いられる。

林太郎に俺の胸の内を告げたいという欲求と、そんなことをして生涯の友を失いたくないという恐怖に苛まれて・・・

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1720f/>

当世柳生新陰流異聞 ～対決・会津一刀流（「あいつ」外伝）

2010年10月26日01時40分発行